

## 核のタブーとアーサー・ビナード作品

—「ここが家だ」「さがしています」「ドームがたり」「ちっちゃいこえ」—

林 伸一

### 1. はじめに

2024年のノーベル平和賞を、日本被団協（日本原水爆被害者団体協議会）が受賞した。

ノーベル委員会は受賞理由について、「核兵器のない世界を実現するための努力と、核兵器が二度と使用されてはならないことを証言によって示してきた」としている。その上で、被団協の活動について、「日本被団協は、数千件に及ぶ証言を収集し、決議や公開アピールを発表し、毎年代表団を国連やさまざまな平和会議に派遣し、核軍縮の緊急性を世界に訴え続けてきました。いつの日か、被爆者は歴史の証人ではなくなるでしょう。しかし、記憶を留めるという強い文化と継続的な取り組みにより、日本の若い世代は被爆者の経験とメッセージを継承しています。彼らは世界中の人々を鼓舞し、教育しています。このようにして、人類の平和な未来の前提条件である核兵器のタブーを維持する手助けをしているのです」と評価した。



2020年 米国出身で広島市在住のアーサー・ビナード氏（Arthur Binard、1967年7月2日生—以下ビナード氏）が谷本清平和賞を受賞した。ビナード氏は、2001年に詩集『釣り上げては』で中原中也賞を受賞してから、多数の絵本を出版するなど目覚ましい活躍を続けている。（林2020a参照）

詩人、絵本作家、翻訳者という顔だけではなく、ラジオ・パーソナリティーとしての顔を持っている。文化放送のラジオ番組「アーサー・ビナード午後の三枚おろし」を2017年から2022年まで担当していた。その後「アーサー・ビナードラジオほこりほこり」を担当している。2016年、ビナード氏は、日本民間放送連盟賞「ラジオ報道番組」最優秀賞を文化放送「アーサー・ビナード『探しています』」で受賞して、翌2017年に『知らなかった、ぼくらの戦争』として小学館から出版している。またギャラクシー賞も受賞している。

2021年、NPO放送批評懇談会により第58回ギャラクシー賞のラジオ部門大賞として文化放送・戦後75年スペシャル「封印された真実～軍属ラジオ」が選ばれた。2020年8月15日の終戦記念日に放送され、戦時下、川口市にある文化放送の送信所がプロパガンダ放送や妨害電波の放送を担っていた事実をフォーカスをあてた。戦時中は、公の表のラジオ（white radio）とプロパガンダのための裏の軍属ラジオ（black radio）があったことをビナード氏が明らかにしている。

ギャラクシー賞は、志ある番組を掘り起こし、制作者たちの番組作りへの情熱に光を当てて顕彰することで現場を鼓舞し、番組の向上・発展を促すことを目的に誕生した。民間の自主的意思を基盤として創設された放送賞の第一号である。表彰は年度単位。

核兵器の恐ろしさ、戦争の悲惨さについて「記憶を留めるという強い文化と継続的な取り組み」に関して、ビナード氏は、紙芝居や絵本、講演などを通して「核兵器のタブーを維持する手助け」に貢献してきている。

以下にビナード氏の絵本や紙芝居、放送などに関する受賞歴などを振り返りながら被団協との関連を考えてみたい。ビナード氏の主な受賞歴は、次の表1の通りである。

表1. アーサー・ビナードの受賞歴

受賞年	賞号と受賞内容
2001	詩集『釣り上げては』（思潮社）で中原中也賞
2005	エッセイ『日本語ぽこりぽこり』（小学館）で講談社エッセイ賞
2007	絵本『ここが家だ ベン・シャーンの第五福竜丸』（集英社）で第12回日本絵本賞
2008	詩集『左右の安全』（集英社）で山本健吉文学賞（詩部門）
2012	ひろしま文化振興財団、第33回広島文化賞（個人の部）
2013	絵本『さがしています』（童心社）で第44回講談社出版文化賞絵本賞、第60回産経児童出版文化賞・ニッポン放送賞
2016	文化放送「アーサー・ビナード『探しています』」で日本民間放送連盟賞「ラジオ報道番組」最優秀賞（翌年『知らなかった、ぼくらの戦争』として出版）
2017	第6回早稲田大学坪内逍遙大賞奨励賞
2018	絵本『ドームがたり』（玉川大学出版部）で第23回日本絵本賞
2019	紙芝居『ちっちゃいこえ』（脚本/アーサー・ビナード、絵/丸木俊、丸木位里）で第58回五山賞特別賞
2020	紙芝居『ちっちゃいこえ』制作とカタリベなどの啓発活動で第32回谷本清平和賞
2021	第58回ギャラクシー賞のラジオ部門大賞：文化放送・戦後75年スペシャル「封印された真実～軍属ラジオ」（ラジオ番組パーソナリティ：アーサー・ビナード）

## 2. 2006年『ここが家だ ベン・シャーンの第五福竜丸』



ビナード氏は、日本語での詩作や翻訳活動をしていた2006年、米国による太平洋・ビキニ環礁水爆実験で被ばくした日本漁船の体験を描いた『ここが家だ ベン・シャーンの第五福竜丸』（集英社）を出版し、2007年の第12回日本絵本賞を受賞した。第五福竜丸事件当時、「放射能病」と呼ばれたことが記されている。

2020年に公益財団法人ヒロシマ・ピース・センターは、ビナード氏に谷本清平和賞を授与した。ビナード氏が受賞した理由は「日本語によるヒロシマに関する絵本や紙芝居などを製作し、自らが語り部として平和の啓発活動をしている」とされている。同センターは、ビナード氏が絵本や紙芝居などの作品を通し、核兵器廃絶と恒久平和実現を深く訴え続けていると評価している。

ビナード氏の絵本『ここが家だ ベン・シャーンの第五福竜丸』（2006年、集英社）、『さがしています』（2012年、童心社）、絵本『ドームがたり』（2017年、玉川大学出版部）、紙芝居『ちっちゃいこえ』（2019年、童心社）などが、同平和賞を受賞した大きな要素だと思われる。（詳細は、林2021a参照）

以上の4作品が、ビナード氏の反核を訴える主要な作品であることは確かである。

そのうち『ここが家だ ベン・シャーンの第五福竜丸』と『ドームがたり』が日本絵本賞を獲得している。一人の作家が、日本絵本賞を二回受賞している例は他にもあるが、非常にめずらしい。

日本絵本賞は、公益社団法人全国学校図書館協議会が主催しており、日本国内で出版された絵本に贈られる。「絵本芸術の普及、絵本読書の振興、絵本出版の発展に寄与する」ことを目的としている。1978年から1992年まで全国学校図書館協議会と読売新聞社が主催していた「絵本にっぽん賞」を継承するものとして、1995年から開始された。（『ウィキペディア（Wikipedia）』参照）

### 3. 第五福竜丸事件と谷本清平和賞

ピナード氏が『ここが家だ ベン・シャーンの第五福竜丸』を出したことで新藤兼人が映画『第五福竜丸』をつくったことが、谷本清平和賞という接点でつながっているように思われる。新藤兼人は、「原爆の子」等多くの映像を通じて、戦争の悲惨さと核の恐怖を訴え、平和を希求する映画監督として、第17回谷本清平和賞を受賞した。

新藤兼人<1912(明治45)年-2012(平成24)年、享年100歳>は、映画監督・脚本家として、表現の自由と思想の自由を、とことん追求した。

1952(昭和27)年、近代映画協会初の自主制作作品として、原子爆弾を取り上げた映画『原爆の子』を発表した。長崎原爆に関しては1950(昭和25)年『長崎の鐘』で脚本を担当している。1959(昭和34)年に『第五福竜丸』を発表したが、興行的には失敗に終わり、近代映画協会には多額の借金が残り、同協会は解散の危機に陥った。(Wikipedia参照)

1954年11月3日に東宝映画『ゴジラ』(監督・本多猪四郎)が公開された。(注1)



美濃部亮吉都知事時代の東京都は「原水爆による惨事がふたたび起こらないように」という願いを込めて、1976年に都立第五福竜丸展示館を夢の島公園内に設立し、第五福竜丸の実物を展示している。

第五福竜丸が、1967年に廃船処分となり、当時夢の島にあったゴミの処分場に放置されていた。それを知った市民による保護運動が起こったことをきっかけに、現在の展示館が作られた。この都立第五福竜丸展示館には、第五福竜丸の実物以外にも、水爆実験による被害の実情や、乗組員の病状についてなど、当時の状況を年表や写真等を元に展示されている。(https://shinkiba.co.jp/2018/04/27/参照)

### 4. 日本原水爆被害者団体協議会(略称:日本被団協)

2024年にノーベル平和賞を受賞した日本原水爆被害者団体協議会(略称:日本被団協または被団協、英語:Japan Confederation of A- and H-Bomb Sufferers Organizations)は、1956年に結成された日本の原爆被爆者の全国組織である。本部は東京都港区芝大門1丁目にある。

A-Bombとは、原子爆弾(英:atomic bomb)あるいは原爆のことで、ウランやプルトニウムなどの元素の原子核が起こす核分裂反応を使用した核爆弾であり、初めて戦争において攻撃用に実使用された核兵器である。原子爆弾は、核爆発装置に含まれる。水素爆弾を含めて「原水爆」とも呼ばれる。

H-Bombとは、水素爆弾(英:hydrogen bomb)または熱核兵器(英:thermonuclear weapon)のこと。水爆とは、重水素および三重水素(トリチウム・注2)の熱核反応を利用した核兵器をいう。なお、ここでいう「水素」とは普通の水素(軽水素)のことではなく、水素の同位体である重水素と三重水素(トリチウム)を示している。(出典:フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』)

被団協は、1954年のアメリカ合衆国によるビキニ環礁での水爆実験(ブラボー実験)を機に広がった原水爆禁止運動の中で、1956年に被爆者の全国組織として長崎で結成された。各都道府県でも被団協が結成され、核兵器の廃絶や被爆者の救済を訴える活動を続けている。(『ウィキペディア(Wikipedia)』参照)警察予備隊、保安隊を経て、1954年に日本の自衛隊が発足している。

ピナード氏は、「ピカドンとジリジリ」という文章で、「ニューメキシコ州と長崎のプルトニウム239の流れが、核開発の本流」とした上で「広島の上空で核分裂を起こしたのはウラン235という物質」と区別している。『No Nukes ヒロシマ ナガサキ フクシマ』(講談社、2015)には、吉永小百合氏が「私の願い」と言う文章を寄せていて、峠三吉の詩を紹介している。同書の編集には、広島、長崎、福島

の大学生メンバーが加わっている。

峠三吉の『原爆詩集』（岩波文庫）に、ピナード氏が次のような解説を加えている。

「1945年から今日まで多種多様な輝かしい詩作品が生み出されてきたが、峠三吉のずば抜けた表現力に着目しても、彼が挑んだ言語的実験の意味の大きさをふまえても、また二十一世紀まで見通せた先見の明を考えても、この『原爆詩集』は驚くべき傑作だ」（解説2・「日本語をヒバクさせた人」）

## 5. 被団協のノーベル平和賞受賞



1954年の第五福竜丸事件を契機として大学で核や原爆について学びたいという思いを強め、1956年に東京理科大学理学部物理学科に入学したのが、田中熙巳（たなか てるみ、1932年4月29日生－以下田中氏）である。田中氏は、被団協代表委員として、2024年12月10日、ノルウェーの首都オスロで行われたノーベル平和賞の授賞式にてメダルと賞状を授与され、日本被団協を代表し、被爆によって5人の親族を亡くした自身の体験などをもとに核兵器の廃絶などを世界に向けて演説を行なった。

田中氏は、1956年大学一年生の夏休みに長崎に帰省した際、日本原水爆被害者団体協議会が結成された第2回原水爆禁止世界大会に参加。1960年に大学を卒業後、東北大学工学部助手となり、1995年より助教授、博士（工学）1996年の同大学定年まで研究・教育に取り組んだ。

また、研究と並行して被爆者運動にも参加し、宮城県の被爆者団体「はぎの会」事務局長などを経て、1985年には日本原水爆被害者団体協議会（被団協）事務局長に就任。東北大学の定年退官を機に埼玉県へ移住し、2003年まで十文字学園女子短期大学教授として教育・研究にあたった。2000年には被団協事務局長に復帰。2017年6月、被団協代表委員に就任した。（『ウィキペディア（Wikipedia）』参照）

日本被団協は、2024年ノーベル平和賞を受賞した。田中代表委員（92）が受賞演説し、「核抑止論ではなく、核兵器は一発たりとも持つてはいけない」と呼びかけた。ウクライナや中東での戦争を巡る国際情勢に触れ、「『核のタブー』が壊されようとしていることに限らない口惜しさと憤りを覚える」と警鐘を鳴らした。（「毎日新聞」2024/12/10参照）（注3）

授賞式は2024年12月10日午後1時（日本時間10日午後9時）に開会。演説で田中氏は、戦争を開始した国の責任で被害者に償う「国家補償運動」と「原水爆禁止運動」を被団協の活動の2本柱として紹介し「『核のタブー』形成に大きな役割を果たした」と強調した。

1945年8月9日に田中氏は、長崎で被爆した自らの体験を紹介し、「一発の原子爆弾は私の身内5人を無残な姿に変え一挙に命を奪った」と無念の思いを語った。戦後の被爆者は「沈黙を強いられ、日本政府からも見放され、孤独と病苦と生活苦、偏見と差別に耐え続けた」と長年の苦節を振り返った。（「毎日新聞」2024/12/10参照）

その上で、被団協として取り組んできた世界での被爆証言が核兵器禁止条約成立（2017年）に寄与したことを「大変大きな喜び」と表現。一方、ただちに発射できる核弾頭が世界に4000発も存在する現状を指摘し、「人類が核兵器で自滅することがないように。核兵器も戦争もない世界の人間社会を求めて共に頑張りましょう」と演説を締めくくった。（「毎日新聞」2024/12/10 22:02・最終更新 12/10 23:49参照）

長年にわたる署名活動など地道な草の根運動が実を結び、ノーベル平和賞受賞となったが、課題は山積しており、反核運動のゴールではなく、出発点と言えるであろう。

## 6. 2012年『さがしています』

ビナード氏が、東京に出版・放送・取材活動の拠点を置きながらも、2011年から広島に住むようになったきっかけは、同氏の『さがしています』（童心社）の制作に打ち込むことができるようになるためであった。

1945年の広島・長崎への原爆投下から、2025年で80年になる。被爆体験を語るカタリベの高齢化が進み、原爆の悲惨さや戦争の惨禍を直接伝えることが難しくなっている。そのような中で、平和記念資料館（原爆資料館）に保存されている被爆者の遺品に被爆体験を語ってもらおうと『さがしています』の制作が企画され、岡倉禎志氏の写真にビナード氏が詩をつけていく形で同書が作られた。（詳細は、林2020a参照）



同書は、第44回講談社出版文化賞絵本賞と第60回産経児童出版文化賞の中のニッポン放送賞を受賞している。

同書の表紙の写真の鍵束は、広島市基町（もとまち）にあった日本軍中国憲兵隊司令部の焼け跡から遺骨と共に発見されたもので、そこには米軍兵士の捕虜12名が収容されていた。米軍兵士12名は、爆撃機で飛来して、撃ち落され、パラシュートで脱出はできたが捕らえられ、独房に入れられていた。8月6日の朝、憲兵たちも捕虜たちも等しく放射線と熱線と爆風にさらされた。（『さがしています』の巻末「この本のカタリベたちのプロフィール」31頁より）

米軍兵士12名は、自国の落とした原爆によって命を落としたこととなる。その無念さを焼け残った鍵束は語り続けている。

2019年、広島市平和記念資料館（原爆資料館）は、「被爆再現人形」を撤去して、リニューアルした。その狙いとは、「被爆」を“あの日、キノコ雲の下にいた人間の目線”から捉え直すことであった。「遺品」や「写真」に刻まれた被爆の記憶やエピソードをひとつひとつ調査し、どのような人が持っていたのか、残された家族は何を思うのか、「個人の物語」を記して展示する。被爆者の平均年齢は、2019年時点で82歳を超えたため、体験を語れる人が少なくなる中、遺品や写真に「あの日の記憶」を語って貰おうとしている。ビナード氏の写真絵本『さがしています』は、原爆資料館のミュージアムショップで頒布されている。貸出用の音声ガイドは、吉永小百合さんの声で収録されている。

タイトルの『さがしています』は、やっとのことで被爆者手帳が交付される段階で、本人が被爆地にいたかどうか証明する書類も焼けてしまったために、証明できる人を「さがしています」とさかんに新聞広告がでたことを思い起こす人もいるとのことである。（注4）

## 7. 第36回谷本清平和賞・森重昭著『原爆で死んだ米兵秘史』



2024年の第36回谷本清平和賞は、被爆死した米兵捕虜について長年にわたり調査活動を行っている歴史研究家で被爆者の森重昭氏に贈られた。広島県在住の森氏は日本本土空襲で命を落とした連合国の捕虜に関する研究者である。

30年以上にわたり、爆心地から約400メートル離れた中国憲兵隊司令部で死去した米国のパイロットの捕虜に関する研究をおこなってきた。この研究をもとに、2008年に森氏は『原爆で死んだ米兵秘史』（光人社）を著した。

2023年に森重昭・森佳代子語り／副島英樹編『原爆の悲劇に国境はないー被爆者・森重昭調査と慰霊の半生ー』が朝日新聞出版から出されている。

森重昭氏は、2008年以来、呉軍港空襲の際に撃墜されたB-24タロア号の乗員

の親類を捜し出そうとしてきた。呉湾で攻撃されたB24爆撃機ロンサムレディー号は、山口県に墜落し、乗組員7人が逮捕され、捕虜になり内6人が広島に送られ、被爆死したことなどが記されている。

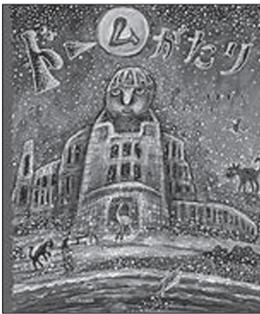
米国のバラク・オバマ大統領は2016年5月27日、現職の大統領として初めて被爆地・広島を訪れ、広島県被団協理事長の坪井直氏（91）、原爆投下で命を落とした12人の米兵捕虜の身元を突き止めたアマチュア歴史家、森重昭氏（79）の2人の被爆者と言葉を交わし、森氏には肩を抱いて“ねぎらい”の気持ちを表した。オバマ大統領はスピーチで、71年前の原爆投下について「世界が変わった。人類が自分自身を破壊する手段を手に入れた瞬間だ」と表現した。（<https://www.nippon.com/>参照）（注5）

森氏がバラク・オバマ氏と面会し、抱擁したことは世界的な注目を集めた。

2016年、森氏は、第64回菊池寛賞を受賞している。

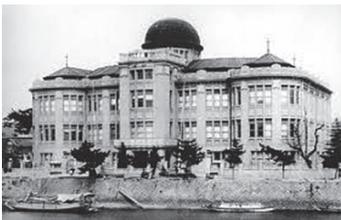
さかのぼって、2009年ノルウェー・ノーベル委員会はバラク・オバマ氏の「核無き世界」に向けた国際社会への働きかけを評価して2009年度のノーベル平和賞を同氏に授与した。ノルウェー・ノーベル委員会はバラク・オバマ氏の受賞に関して冷戦終結を促した政治活動をしたヴィリー・ブラント、ミハイル・ゴルバチョフと比較して同氏は受賞するに値する活動をしたと評価している。就任してから1年も経っていない首脳の受賞は極めて異例であった。

## 8. 2017年『ドームがたり』



原爆体験を語るカタリベ（語り部）が高齢化し、直に体験を聴くことが難しくなる中で、原爆ドームそのものに語ってもらおうと『ドームがたり』の絵本製作がビナード氏の手によって始められた。

ビナード氏は、「広島駅から路面電車に乗って『原爆ドーム前』で降り立ち、丸い頭の骨を見あげた瞬間、原爆が落とされる前はどうかだったのか、知りたくなかった」と絵本のあとがきに記している。原爆ドームを擬人化して、丸い屋根を頭に建物の残存した部分を骨に見たてて、語らせようと思ったところが、詩人の創造力の逞しさであろう。



「広島県物産陳列館」だったものが、やがて「広島県物産陳列所」に15年に渡る日中戦争下に「広島県産業奨励館」になり、戦後は「原爆ドーム」になった建物に対して、ビナード氏は、「原爆というラストネームと、ドームのファーストネームに、本当は納得していない」と想像する。

ガイドブックを見て、原爆ドームの世界遺産登録の名称が「広島平和記念碑」であることを知ったり、修学旅行で原爆ドームや平和記念資料館を訪れ、原爆の悲惨さや戦争の惨禍の一端を垣間見ることになる。勝手に「原爆ドーム」と命名されたドーム君が、戦前・戦中・戦後のことを物語ってくれたなら、大いに説得力があるカタリベになるだろう。（『さがしています』のあとがきで、ビナード氏がカタリベと表記）

ビナード氏は、「強い探求心と鋭い感情で、被爆者たちの声をくみ上げ、多彩な文芸作品を創出。ピカドンを後世に伝えるアメリカ人語り部」と評されると中国新聞は、報じている（2020年11月10日・朝刊より）

核エネルギーの軍事利用が原子爆弾であり、平和利用が原子力発電であると宣伝されてきた。そこから、原爆には反対だが、原発には賛成とする人が出てきた。

しかし、「爆抜き原爆装置」を「原子炉」と名付け、その熱の「湯沸かし機能」を利用する附属品

の「発電機」をつけて、「原子力発電所」として売り込みを始めたとビナード氏は、見ている。(アーサー・ビナード『ドームがたり』あとがき参照)

## 9. サーロー節子氏とICANについて

第26回(2014年)谷本清平和賞受賞者にサーロー節子氏(被爆体験証言者、カナダ・トロント市在住)がいる。

2017年『ドームがたり』が出版された年にサーロー節子氏は、国連で演説し、核兵器禁止条約が採択された。当条約は1996年4月に起草され、2017年7月に国連総会で賛成多数で採択され、2020年10月に発効に必要な50カ国の批准に達したため、2021年1月に発効となった。ところが日本政府は同条約をいまだに批准していない。



サーロー節子氏は、国連での核兵器禁止条約採択に貢献したことにより、ご褒美に谷本清平和賞を受賞されたのではなく、それまでの被爆体験証言者としての地道な草の根レベルの活動が評価され、受賞したのである。

核兵器廃絶国際キャンペーン(英: International Campaign to Abolish Nuclear Weapons、略: ICAN アイキャン, アイカン)は、各国政府に対して、核兵器禁止条約の交渉開始・支持のロビー活動を行う目的で設立された国際的な運動(キャンペーン)の連合体である。赤のピースマークで弾頭(加害の主体を成す部分)がへし折られたミサイルのイメージがシンボルになっている。

条約づくりの取り組みの拠点として2007年4月メルボルンに事務所が開設され、ICANが発足し、核兵器禁止条約の採択などに貢献した。その後、2017年にノーベル平和賞を受賞した。



2023年の核兵器禁止条約締約国会議には条約に参加する59の国と地域のほかに、オブザーバーとして35か国が参加し、アメリカの核の傘のもとにあるNATO(北大西洋条約機構)の加盟国のドイツやベルギーなどもオブザーバーとして議論に加わったが、日本政府は参加しなかった。

一方で、広島や長崎の被爆者が発言し、改めて自身の体験に基づいて核兵器の非人道性を訴えた。

2023年の締約国会議について、国連の軍縮部門トップを務める中満事務次長は、NHKとのインタビューで、「核の使用や核による威嚇は絶対に許してはならないという強力な規範、メッセージを発信している。これは現在の安全保障環境の危機感のあらわれで、核兵器禁止条約が果たしている注目すべき役割のひとつだ」と強調した。

半世紀以上にわたって核兵器の廃絶を訴え続け、核兵器禁止条約の成立にも尽力した、カナダ在住の被爆者、サーロー節子さんは「この暗黒の時代において、核兵器禁止条約は私たちを導く光だ。条約を強化し本当に機能させるために、私たちはできる限りのことをしなければならない」と述べた。

一方、記者団が核抑止論について尋ねると「核抑止が正しいとはまったく思わない。核兵器が抑止力としてどう機能するといふのか。私はことばを持っていないし、議論もしたくない」と強く批判しました。

また、現地で活動を行った大学生は「現地ではさまざまな発信で核の問題を普遍化しようという取り組みが多くみられたのが印象的で、軍縮の分野で活躍できる若者の存在が必要だと改めて感じた」と話した。

核軍縮や軍備管理に詳しい一橋大学の秋山信将教授は「核兵器のもたらすネガティブな影響について、建設的な議論ができていたと感じた。核兵器の非人道性やリスクに関する新たな科学的根拠など

を強調し、核抑止力が中心となっている安全保障の考え方に挑戦する政治宣言が採択されたのは、非常に重要だ」と評価した。

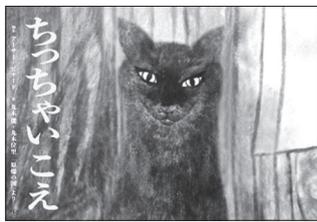
また、今回の会議で、アメリカの核の傘のもとにあるNATOの加盟国がオブザーバーとして議論に加わったことに言及し、「オブザーバー参加した国々のステートメントを読むと、ロシアによるウクライナ侵攻に言及しながら核廃絶に関する状況の認識として昨年より厳しい文言が並んでおり、条約の締約国と核抑止力が安全保障の一部になっている国々との間の溝を埋めていく取り組みの難しさが、改めて浮き彫りになった」と指摘した。(NHKニュースより)

広島市が「核兵器禁止条約の署名国・批准国一覧」を発表しているが、2024年9月24日現在、署名：94か国・地域、批准：73か国・地域となっている。

核兵器禁止条約については、川崎哲監修の『絵で見てわかる・核兵器禁止条約ってなんだろう?』という本(全112頁)が旬報社から2021年に発行されている。

## 10. 2019年 紙芝居『ちっちゃいこえ』

2020年9月末にNHK広島局は、ビナード氏の谷本清平和賞受賞を次のように報じている。



「ビナードさんは9年前から広島市で生活しながら被爆者を取材し、みずから制作した詩や絵本、それに紙芝居を通じて核兵器の廃絶や平和について訴え続けています。そのうち、7年かけて制作した紙芝居『ちっちゃいこえ』は、広島に投下された原爆によって細胞が破壊されていく様子を表現していて、自ら全国各地を訪れて紙芝居を披露しています。

受賞についてビナードさんは、『おおきな役割を果たした谷本清牧師が築いた土台の上で活動してきたが、受賞によって谷本牧師とつながりを持つことは光栄です。今後はさらに表現方法を工夫して広島の実態に出会っていない人たちに原爆の悲惨さを伝えていきたい』と話しています。(NHK広島NEWS WEB 2020年9月28日より)

新型コロナウイルスの影響で2019、2020年度分の五山賞選考は延期となっていたが、2022年1月にビナード氏の『ちっちゃいこえ』が2019年度刊行の56作品の中から、紙芝居の演じ手や画家らの審査を経て選ばれたことが発表され、2022年7月31日、第58、59回五山賞の贈呈式が、東京都内で開かれた。

「五山賞」というのは、子どもの文化研究所が主催して、教育紙芝居の生みの親、高橋五山の業績を顕彰して1962年に設けられ、一年間に出版された紙芝居の中から最も優秀な作品に授与される伝統のある賞である。主催の子どもの文化研究所は次のように受賞理由を示している。

「本作品はビナードさんが7年も対峙した大作。大きな訴求力を持つ優れた作品で、本作品を単に五山賞として顕彰するのではなく、もう一段別の立場から考え見ていくことが大事ではないかという意見から「特別賞」として顕彰された。この作品が評価され、これから名画を土台にした紙芝居が作られるムーブメントの発生を予感する作品である」(子どもの文化研究所のHP参照：第58回五山賞 特別賞・一般財団法人文民教育協会「子どもの文化研究所・子どもの文化学校」より)

第1回～56回までの受賞作に関しては、林(2019)を参照していただきたい。

丸木俊・丸木位里さんの絵「原爆の凶」をもとに、ビナード氏によって再構成された紙芝居『ちっちゃいこえ』の中でじいちゃんが歌う「ぼうや ねんね ねんねしな。父さん つよい 兵隊さん…」という子守唄があるが、それは戦時中に「軍国子守唄」として実際に歌われていたものをもとにしている。今でも当時の音源をたどることはできるが、紙芝居の下の演出ノートには、「大きめの声で、自

由に節をつけてうたう」とある。

紙芝居『ちっちゃいこえ』では、ネコがカタリベとなり、被爆体験を語るという設定ではじまり、家族のことや命をつくりつづける体の中のちっちゃい声（細胞）のこと、ヒロシマのことなどが話される。わたしたちはどうすれば生きていけるのか？ 絵が語りかける内容に、一人ひとりが耳をすまらず紙芝居になっている。（初版：2019年5月20日 判型：B4判／サイズ：26.5×38.2cm 頁数：16場面、「童心社」ホームページ参照）

第29回の谷本清平和賞を公益財団法人「原爆の図丸木美術館」が受賞している。

同美術館は、丸木俊・丸木位里共同制作の「原爆の図」の永久保存と社会的な芸術・文化活動を通じて平和の創造に寄与している。

前述のビナード氏初の紙芝居作品『ちっちゃいこえ』も丸木俊・丸木位里の「原爆の図」をもとに、再構成された点に注目すると谷本清平和賞という接点でつながっている。

## 11. 2021年『英語と日本語で読んでみよう 世界に勇気と希望をくれたメッセージ』

### ④文化・スポーツ界で『世界に勇気と希望をくれたメッセージ』

パトリック・ハーラン著・監修で標記の絵本が岩崎書店から発行された。同書は、ビナード氏の作品ではないが、ビナード氏の平和運動への貢献が紹介されている。

表紙には、チャールズ・チャップリン、ボブ・ディランと並んでアーサー・ビナードの名前が写真入りで出ている。

さらにピエール・ド・クーベルタンと嘉納治五郎の名前が続く。同書が発行された2021年は、コロナ禍で東京オリンピック2020が1年延期されて開催された年であり、かなりオリンピックを意識して編集されたことが推察される。

なぜ、表紙の五人の中にビナード氏に加わったのかは、ボブ・ディラン（Bob Dylan）が「戦争と平和、自由と人権を問いつづけ、歌手として初のノーベル文学賞受賞」という形で紹介されたことに関連している。



1962年にボブ・ディランが作詞・作曲した「風に吹かれて (Blowin' in the Wind)」は「どれだけの砲弾が飛びかえば、武器が禁止されるようになるのだろうか？」と当時のベトナム戦争に抗議する反戦運動の中でさかんに歌われた。ボブ・ディランのノーベル文学賞受賞の理由は「偉大なアメリカの歌の伝統の中で、新たな詩的表現を想像した」ことによるとされる。詩的表現とは「直接的な言葉をつかわないたくみな隠喩表現」のことを言う。「風に吹かれて (Blowin' in the Wind)」の中の「道 (road)」は、「戦争 (war)」を指しており、「白鳩 (white dove)」は「平和」を、「山 (mountain)」は「体制」や「概念」を、「ある人々 (some people)」は「黒人」を表わしていると考えられる。（『世界に勇気と希望をくれたメッセージ』 p.19）

ボブ・ディランのノーベル文学賞は、詩の内容からノーベル平和賞に匹敵すると思われる。

## 12. 「核のタブー」と「非核三原則の見直し」「核共有」論議

2024年のノーベル平和賞を日本被団協が受賞した。選考委員会が授賞理由にあげたのは、被爆者が国内外で地道に体験を証言し続けたことにより、核使用をタブーとする規範「核のタブー」の確立に貢献したことを挙げている。核兵器を保有するロシアやイスラエルによる地域戦争が激化する中、被

団協の活動を見てきた人々はどう受け止めているのだろうか。

2022年3月3日の「朝日新聞デジタル」は、次のように報道している。

日本維新の会は2022年3月3日、「ニュークリア・シェアリング（核共有）」の議論を政府に求める提言を、林芳正外相（当時）あてに提出した。ロシアのウクライナ侵攻を受け、「核保有国による侵略のリスクが現実存在する」とし、対国内総生産（GDP）比2%の防衛費増額を要求。さらに、「核共有による防衛力強化等に関する議論を開始する」ことを求めた。

2022年3月2日の役員会で確認した当初の提言案には「非核三原則の見直し」も議論すべきだとの文言が盛り込まれていた。しかし、被爆者団体などから批判の声が上がったことを受け、同日夜、幹部が協議し削除した。「核を持たない国は核保有国による侵略のリスクが高い」という文言も削った。

被爆者団体というのは、被団協などを指していると思われる。「非核三原則」は、後述する佐藤栄作のノーベル平和賞受賞に関わる問題である。それを無責任な野党の立場から「非核三原則の見直し」「核共有」などと軽々に求めないでほしいものである。被団協でなくても、国民的な批判の声が上がると思われる。

「朝日新聞デジタル」は、当時の松井一郎代表（大阪市長）は2022年3月3日、削除について「非核三原則はすぐさま破棄と拡大解釈される恐れがあるから、慎重な対応が必要だと考えた」と説明した。被爆者団体の批判には「核兵器はもってのほかだと僕も思う」と強調。そのうえで、ロシアのウクライナ侵攻を念頭に「核を保有している国が力による現状変更を試みたという事実を目の前にして、（核共有や非核三原則の見直しについて）議論もするなというのは違うと思う。そのままやり過ぎるのは無責任だ」と語ったと伝えている。

提言を提出した後の会見で、藤田文武幹事長は非核三原則のうち「持たず」と「作らず」について、「我々が率先して変えていこうという趣旨でミスリードされるのは本意ではない」と説明。一方で「持ち込ませず」については「論理的に少し整理しないといけない」と述べ、議論が必要との認識を改めて示した。（以上、2022年3月3日の「朝日新聞デジタル」より）

放っておくと日本が堅持してきた「非核三原則」が切り崩されてしまう恐れがある。そもそも「非核三原則」のもととなるいきさつを以下に見ておきたい。

### 13. 佐藤栄作のノーベル平和賞受賞

1974年の佐藤栄作のノーベル平和賞受賞は、原爆被災国日本として非核政策を堅持し、「非核三原則」の制定したことなどが評価されてのものであった。

佐藤栄作は、首相就任間もない1965年8月に沖縄訪問、「沖縄が返らなければ、日本の戦後は終わらない」と声明。以来、「非核三原則」の声明（1967年）や小笠原諸島返還協定調印（1968年）、核不拡散条約調印（1970年）、沖縄の「核抜き・本土並み」返還協定調印（1971年）などを実現した。これらの業績が、原爆被災国日本として非核政策を堅持し、太平洋地域の平和、安定に寄与したとして「平和賞相当」（ノーベル平和賞委員長・リオネスト女史＝ノルウェー下院議長）と評価された。（是佳辰（1990）編著『ノーベル平和賞—90年の軌跡と受賞者群像—』より）

実際には平和賞を選考するノルウェーのノーベル平和賞委員会は、2001年に刊行した記念誌『ノーベル賞 平和への100年』の中で、「佐藤氏はベトナム戦争で、米政策を全面的に支持し、日本は米軍の補給基地として重要な役割を果たした。のちに公開された米公文書によると、佐藤氏は日本の非核政策をナンセンスだと言っていた」と記し、受賞理由と実際の政治姿勢とのギャップを指摘した。同記念誌はノルウェーの歴史家3名による共同執筆で、同年8月の出版記念会見の際にその1人のオイビ

ン・ステネルセンは「佐藤氏を選んだことはノーベル賞委員会が犯した最大の誤り」と見解を述べて当時の選考を強く批判し、「佐藤氏は原則的に核武装に反対でなかった」と語ったという。

この報道に対して次男の佐藤信二は「受賞当時は一部から抗議を受けたが、それは誤解で父は真の平和主義者だった。非核三原則を打ち出したのは佐藤内閣であり、受賞はその点を評価された。父は受賞したとき『佐藤個人ではなく、国がもらったものだ』と語っている」とコメントした。

ただし上記の通り、2009年（平成21年）に、沖縄への核持ち込みに関する密約の合意文書が佐藤家に保管されていたことが明らかになった。さらに、2010年（平成22年）10月に『NHKスペシャル 核を求めた日本』において、佐藤内閣下で、極秘に核保有は可能か検討が行われていたことが明るみに出た。

佐藤栄作は、ノーベル平和賞の受賞記念講演の原稿を作成した際に、助言を求めた学者（高坂正堯・梅棹忠夫ら）の意見を入れて「非核三原則を世界各国も導入することを望む」という内容の一節を入れたが、最終的に削除した。これについて上記『NHKスペシャル』では、佐藤栄作が最終稿を作る前に、来日したアメリカ国務長官のヘンリー・キッシンジャーと面談した影響を指摘している（キッシンジャーは、「何をとぼけたことを言い出すのか」と反発したという）。

1974年（昭和49年）11月19日に元赤坂の迎賓館で行われた佐藤・キッシンジャー会談の具体的内容は、佐藤栄作氏がキッシンジャー氏に、「もし可能なら、核兵器の先行使用の放棄を話し合うため、核保有5か国が集まるよう受賞講演で提案しようと考えている」と述べ、すべての国が核兵器の先行使用を放棄する方向への提起を授賞式講演「核時代の平和の追求と日本」に盛り込みたい意向を伝えた。

しかし、キッシンジャー氏は、「米国はそうした話し合いへの参加を拒んでいる唯一の国だ」と答え、「米国が核兵器の先行使用を放棄したら、それは日本にとって危険だ」として、ソ連と中国の軍事的脅威を理由に拒んだ。

キッシンジャー氏は1973年ベトナム戦争における米軍の関与終結に向けた調整に寄与したことでノーベル平和賞を受賞した。また秘密外交を通じ、当時のニクソン大統領による1972年の訪中を実現したことで評価された。北ベトナムのレ・ドック・ト氏と共にノーベル平和賞を受賞したが、レ・ドック・ト氏は賞を辞退している。この授与は議論を呼び、ノーベル委員2人が辞任している。

そのキッシンジャー氏は、1974年「ソ連は欧州の国々を上回る兵力を、中国も隣国を上回る兵力を持っている。核兵器がなければ、ソ連は通常兵力で欧州を蹂躪できます。中国も同様です」という見解を示し、11月20日の中曽根康弘氏との会談でも、もしも米国が非核国への核使用を放棄すれば、ソ連の東欧の同盟国にも使用できなくなるとの懸念を示した。中曽根康弘氏がNPT（核兵器不拡散条約）に関連して発した「米ソは非核国に核兵器を使ったり、核兵器で脅迫したりしないと確約できますか」という要求をキッシンジャー氏は、拒んだ。

ビナード氏も、「核兵器はおとす（落とす）ためではなく、おどす（脅す）ために今も使われている」と述べている。

なお、ベトナム戦争支援政策、中国敵視外交などを進めた佐藤栄作のノーベル平和賞受賞を疑問視する意見もあり、フランスの『ル・モンド』紙は「驚くべき、異議のある決定」と批判している。

ノルウェーのオスロ国際平和研究所でアジアを専門に研究しているスタイン・トネソン名誉研究教授は、他ならぬ日本からを中心に多くの批判が寄せられたとしながらも、「佐藤氏の受賞を支持したアジアの多くの国がその後、日本の高度経済成長路線をなぞって経済を優先させ、軍事的な冒険を避ける政策をとったことで、地域的な平和を長く享受することができた」とし、この受賞が周辺のアジ

ア諸国に良い影響を与えたと評価した（「佐藤元首相が」ではなく、「アジアで平和賞が出たことが」である）。（以上、フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』佐藤栄作参照）

確かに佐藤栄作の「非核三原則」はタテマエで、ホンネは「原則的に核武装に反対でなかった」のかもしれない。しかし、「もし可能なら、核兵器の先行使用の放棄を話し合うため、核保有5か国が集まるよう受賞講演で提案しようと考えている」と考えていたのも事実であろうから、現在の核兵器禁止条約に核保有国が署名しない問題にアプローチする方法を模索していたとも考えられる。

キッシンジャー氏や佐藤栄作氏、バラク・オバマ氏という政治家がノーベル平和賞を授与されても、胡散臭い、何か裏があるのでは、ホンネとタテマエは違うと批判され、まともには取り上げられないことが多い。しかし、国を引っ張るリーダーが交渉のテーブルにつかなければ、核兵器禁止条約も実効性が期待できない。ノーベル平和賞受賞を契機に、被団協やICANと核保有国および核の傘の下に留まろうとする国々の本腰の対話が必要だと思われる。

日本国は、せっかく憲法で非戦条項、戦争を放棄するといつて、自分の方からしかけることはない決めて国であるから、被団協やICANと核保有国の間の仲介役を果たせる立場にあるはずである。

日本国憲法の第9条の非戦条項は、資本主義国にも社会主義国にもない理想的で高度な条項である。ロシアとウクライナの戦争の停戦を呼び掛ける立場に立つこともできるはずである。イスラエルとハマスの戦争においても同様である。米国のトランプ大統領に停戦交渉役を期待するような「寄らば大樹の陰」の態度では、到底世界平和は望めないであろう。裏金問題に手を染め、自分の利益しか考えようとしない日本の政治家は、グローバルな視野で、世界の平和と安全をリードしていくことができないであろう。理想も想像力もない政治指導者が頼りにならない現状においては、創造力豊かなアーサー・ビナードや地道な草の根運動家に期待するしかないのであろうか。

## 14. 今後の課題

山口の朗読屋さんは、「アーサー・ビナード研究会」を2019年10月12日（土）以来、朗読カフェ形式で開催して来た。初回は、13人の参加であったが、一人5分のブック・トーク形式で、自己紹介とともに各自が持ち寄ったビナード氏の作品が紹介された。前述のビナード氏の紙芝居『ちっちゃいこえ』も上演された。同年8月11日の「アーサー・ビナードとともに平和を考える朗読+お話し会」に参加した100名に葉書で告知された。

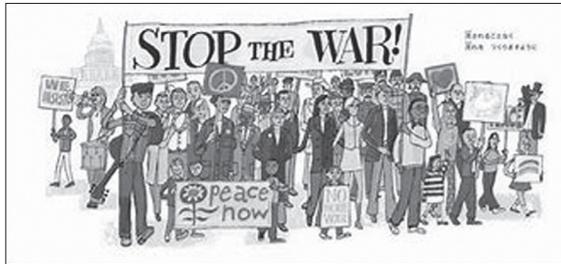
第2回目では、絵本『父さんがかえる日まで』（モーリス・センダック作・偕成社）、『ここが家だ』ベン・シャーンの第五福竜丸』『さがしています』『はじまりの日』『プレッツェルのはじまり』『キンコンカンせんそう』『どんなきぶん』『すばらしいみんな』『雨ニモマケズ』『はらのなかのはらっぱで』『日々の非常口』『わたしの森に』などのビナード氏の作品が紹介された。



『はじまりの日』は、ボブ・ディラン作／ポール・ロジャース絵／アーサー・ビナード訳で岩崎書店から出されている。『はじまりの日』の原題は＜Forever Young＞で、直訳したら「いつまでも若く」とアンチエイジングの内容かと誤解されてしまう。アメリカを代表するロック・ミュージシャンのボブ・ディラン（ノーベル文学賞受賞者）が、息子さんのことを思いながら作った名曲で、「毎日がきみのはじまりの日」と歌うことにより、父親の温かな言葉と楽しい絵が響き合う内容である。

きみが 手をのばせば しあわせに とどきますように  
きみのゆめが いつか ほんとうに なりますように

ビナード氏は、翻訳にあたって、実際に歌って楽しめる日本語をつけた。遊び心いっぱいの絵には、ディランに影響を与えた人たちが散りばめられて、そこからまた新しい世界が広がっていく。



『はじまりの日』の中に「戦争反対」の横断幕やプラカードを掲げて、デモ行進をしている場面がある。その中には、ピースマークを手にしている人も描かれている。そのピースマークは、ノーベル平和賞を受賞したICANのシンボルマークに受け継がれている。子どもたちの姿もある。

ボランティア・グループの山口の朗読屋さんとしても「アーサー・ビナード研究会」を年に5回～10回の割で重ねてきた。「アーサー・ビナード研究会」は、2019年以来毎年一回アーサー・ビナード氏を招いて、公開の朗読会とお話し会を6年間続けてきた。ビナード氏を招くにあたって、年ごとのテーマを決めて作品の検討会と朗読練習を続けてきた。(林2022・林2023・林2024参照)

2025年でビナード氏を招いての朗読会は、7回目になるが、ビナード氏の翻訳絵本『ほんとうのサーカス』を中心に、中原中也の「サーカス」、金子みすゞの「曲馬の小屋」などの詩とのつながりをさぐっていく予定。朗読劇の要素を取り入れて、挑戦していきたい。

「山口の朗読屋さん」としても、2022年と2023年には「ウクライナ民話の朗読会」、2024年には、オスタップ・スリヴィンスキー作・ロバートキャンベル訳『戦争語彙集』（岩波書店）を読む朗読会を実施するなど視野を広げようとしている。今後も若手の朗読者育成と戦争のタブーと核のタブーの裾野を広げることに貢献できる朗読会を実施していきたい。

(注1) 1954年の『ゴジラ』は、海底の洞窟に潜んでいた侏羅紀（ジュラ紀）の怪獣「ゴジラ」がたび重なる水爆実験で安住の地を追われ、東京に上陸して破壊の限りを尽くす。第五福竜丸事件を背景に、反核や文明批判をテーマとした濃密な人間ドラマは、単なる娯楽映画の枠を超えたと高く評価された。キャッチコピーは「ゴジラか科学兵器か驚異と戦慄の一大攻防戦!」「放射能を吐く大怪獣の暴威は日本全土を恐怖のドン底に叩き込んだ!」。2023年11月3日に公開された日本の特撮映画『ゴジラ-1.0』（ゴジラ マイナスワン）は、戦後間もない日本を舞台に描かれた。タイトルに付けられた-1.0には、「戦後、無（ゼロ）になった日本へ追い打ちをかけるように現れたゴジラが、この国を負（マイナス）に叩き落とす」という意味がある。『ゴジラ』シリーズでは37作目であり、国産の実写作品としては通算30作目。ゴジラ生誕70周年記念作品と位置付けられている。第96回アカデミー賞では邦画・アジア映画史上初の視覚効果賞を受賞した。(ウィキペディア (Wikipedia) 参照)

(注2) 三重水素またはトリチウム（英：tritium、記号：T）は、質量数が3である水素の同位体で、半減期が12.32年。つまりトリチウムが、ヘリウムに半分変わるのに12.3年かかるため、長期間放射線を出し続ける。日本政府は2021年、東京電力福島第一原子力発電所で増え続けている放射性物質のトリチウムを含む汚染水を海洋に放出を決めた。トリチウムは、水素と同じように水として存在するため、汚染水から分離することは難しい。河田昌東氏（分子生物学と環境科学の専門家）は、トリチウム水は普通の水と同様、口や呼吸、皮膚を通じて体内に入り、細胞

中で様々な合成・代謝反応に関与し、水素と同様に蛋白質や遺伝子DNAの構成成分になるとしている。体内の有機物に取り込まれたトリチウムは「有機結合性トリチウム：OBT (Organic Bound Tritium)」と呼ばれ、その分子が分解されるまで細胞内に長期間とどまり、ベータ線を出し続けて内部被曝をもたらすとしている。有機結合性トリチウムの体内残留期間は少なくとも15年以上とのことで、体内に入っても短期間に排出されるというのは間違いである。ビナード氏も内部被曝を問題視している。

(注3) 「核のタブー」のタブー (taboo) とは、もともとは未開社会や古代の社会で観察された、何をしてはならない、何をすべきであるという決まり事で、個人や共同体における行動のありようを規制する広義の文化的規範である。語源はポリネシア語<tabu>であり、月経を意味するものだと言われる。18世紀末にジェームズ・クックが旅行記において、ポリネシアの習俗を紹介する際に用いたことから西洋社会に伝わり、その後世界各地に同様の文化があることから広まった。禁忌 (きんき)。

(注4) 戦死した父親と大空襲で亡くなった母親の顔を思い出すことができない子どもの話が紙芝居『父のかお母のかお』(童心社)になっている。その中でラジオの「尋ね人」の放送を聞く場面が出てくる。戦後、行方不明の人を「さがしています」との放送に多くの人が耳を傾けた。

(注5) バラク・オバマ氏の政治に対して、ビナード氏は批判的であった。特にオバマ氏の広島訪問に関しても平和資料館の見学が駆け足で通り過ぎたような短時間であったことや原爆投下に関するスピーチの内容が、まるで他人事のように表現されたことにビナード氏は、強い不満を表明している。

## 【参考文献】

- アーサー・ビナード編著 (2017) 『知らなかった、ぼくらの戦争』(小学館)
- 川崎哲監修 (2021) 『絵で見てわかる・核兵器禁止条約ってなんだろう?』旬報社
- 是 佳辰 (1990) 編著『ノーベル平和賞—90年の軌跡と受賞者群像—』河合出版
- 峠 三吉 (2016) 『原爆詩集』(岩波文庫)
- 「No Nukes ヒロシマ ナガサキ フクシマ」編集部 (2015) 『No Nukes ヒロシマ ナガサキ フクシマ』(講談社)
- 林 伸一 (2019) 「紙芝居と絵本の活用と再評価—『街の朗読屋さん』の視点から—」山口大学文学会発行『山口大学文学会志』第69号、pp.21-35
- 林 伸一 (2020a) 「アーサー・ビナードについての研究—絵本の朗読と図書館の役割を考える—」山口大学文学会発行『山口大学文学会志』第70巻、pp.49-69
- 林 伸一 (2020b) 「朗読会の可能性を考える—ボランティア・グループ『山口の朗読屋さん』の視点から—」山口大学人文学部国語国文学会発行『山口国文』第43号、pp.132-146
- 林 伸一 (2021a) 「アーサー・ビナードと谷本清平和賞—絵本と紙芝居の果たす役割を考える—」山口大学文学会発行『山口大学文学会志』第71巻、pp.57-74
- 林 伸一 (2021b) 「アーサー・ビナードの翻訳絵本—『父さんがかえる日まで』論—」山口大学人文学部異文化交流研究施設発行『異文化研究』第15巻、pp.12-31
- 林 伸一 (2022) 「アーサー・ビナードを囲む朗読+お話し会—コロナ禍の開催と図書館の運営について—」山口大学文学会発行『山口大学文学会志』第72巻、pp.51-74
- 林 伸一 (2023) 「アーサー・ビナードと平和を考える朗読会—『ぼくトリ』『やまなし』『イソップ』

について一」山口大学文学会発行『山口大学文学会志』第73巻、pp.23-38

林 伸一（2024）「アーサー・ビナードの作品について—新たな発見と気づき—」山口大学人文学部  
異文化交流研究施設発行『異文化研究』第18巻、pp.39-51

森重 昭（2008）『原爆で死んだ米兵秘史』（光人社）

#### 【謝辞】

毎回、朗読会の告知をしていただいている「こどもと本ジョイントネット21」の山口智子氏に感謝致します。また、「さよなら！上関原発・放射能汚染から子供を守ろう いのち・未来 うべ」の運動をしている尼崎安秀氏には、本稿の原稿段階でのチェックをお願いしたところ、快く引き受けていただき、修正箇所を指摘していただいた。また、「山口の朗読屋さん」のメンバーや山口短期大学の学生にも校正作業を手伝っていただいた。この場をお借りして、感謝したい。